

(様式1)

令和2年8月28日

宮津市議会議長 徳 本 良 孝 様

会 派 名 無所属クラブ  
代表者名 星 野 和 彦 ㊞

### 政務活動費 調査研究(視察)報告書

- 1 視察年月日 令和2年7月31日(金)
- 2 視察先・項目 京丹波自然工房(京丹波町)  
・有害鳥獣施設の運営について
- 3 参加者氏名 星野 和彦 久保 浩 以上2名
- 4 経 費 4,000円(2,000円/1人あたり)
- 5 添付資料 視察研修行程表・資料(別添のとおり)

## 政務活動費 調査研究(視察)報告書

視察内容:京都府京丹波町「京丹波自然工房」の取り組みについて

### 1. 視察目的・内容

「京丹波自然工房」では、鳥獣被害対策・農林業振興・地域活性化等を目的としてハンターの育成に取り組まれている。

垣内代表の「若者に職業としてハンターを選択してもらうためには、商品価値の高い食肉を安定的に提供できる状況を創出すべきである」との考えに基づいた事業運営がなされている。商品価値の高い食肉を生産するためには、捕獲後短時間のうちに適切な処理と加工を行なう必要がある。

その目的を達成するための環境整備として、ハンターが必要最小限の労力で有害鳥獣として捕獲した個体の処理を行なうことのできる施設を効果的に運用する必要がある。

しかし、全国の自治体を対象としたアンケートによると、有害鳥獣として捕獲された個体の約7割が現地で埋設処理されている。

ハンターの負担軽減と自然環境の整備という二つの観点から考えても有害鳥獣の処理施設の効果的な運用を行なうべきである。

また、本市においても、この施設と同様の生物処理を行なっているが、必ずしも当初の見込み通りの処理状況になっているとは言えないのが実態である。

処理速度の問題、臭気の問題等具体的な課題が生まれている。

そこで、本市施設の効果的な運用に資することを目的として、本市と類似の処理施設を適切に運用されている「京丹波自然工房」の視察研修を行なうものである。

「京丹波自然工房」の処理施設では捕獲した有害鳥獣を微生物により分解する処理を行なっている。

タンパク質が微生物によって分解される過程でアンモニア等の窒素化合物等が発生することにより強い臭気が発生する。

近隣に住宅地がある処理施設ではこの対策が必要となる。

ここに搬入された個体は 60℃に設定された処理層で 20 時間かけて微生物により分解される。処理層内の空気は吸引され脱臭装置に運ばれる。

脱臭装置内はウオーターシャワーにより臭気のもとになる空気中の粒子等を水中に沈殿させ、その水の浄化処理を行なっている。

また、処理施設のランニングコストの主なものは、電気代5万円/月、処理層に投入する微生物代が約 90 万円/年(約 30 万円×3 回)、防犯カメラ 3 台による安全管理費 36 万円/年、等がある。

### 2. 考察・検証・成果等

#### 【久保 浩】

当該工房は、平成 25 年に施設整備され、国産ジビエ認証施設第 1 号として認証された。

取り扱い獣種は、シカ、イノシシである。年間処理頭数は約 400 頭、工房従事者数は、7 名(内 4 名がジビエハンターとして現場に赴き止め刺し・放血を実施。

主な販路として、首都圏のレストラン、小売店や「高島屋」に精肉を供給。

本工房の特徴的な取り組みとして、独自の衛生管理マニュアルに基づき、全ての工程の作業

記録を作成、捕獲時の体温や内臓の上対等もチェック、個体ごとに識別番号を付け、行程ごとに処理する部屋を分けるなどで品質・衛生管理を徹底している。

高島屋と連携し食肉処理施設の運営、管理状況の確認作業を繰り返し約1年かけて衛生面や安全性の確認を受け、高級ブランドとして高島屋洛西店で平成29年7月から常設販売、30年からは、京都店でも常設販売が開始されている。

食肉としての必要な部分以外は、分解処理施設により、微生物発酵処理で、全て跡形もなくきれいに消滅していく。

ただし、ここに至るまでには、攪拌機内温度の適温設定へ試行錯誤している(効率的にきれいに消滅させていくには80℃を維持がベスト)、作業場内の結露を防ぐため換気扇の設置(状況をみながら最終6台を設置している)

それでも、捕獲した個体の状況などにより、年間に2～3回は、当該発酵消滅システムでもうまく消滅できないケースがあり、この場合、外部業者に処理を依頼することがあるとのこと。

代表が話されていて、大変重要だと感じた点は、「ジビエ加工するにも、発酵処理システムをうまく稼働できるかどうか、自分たちの責任で、誰かがやってくれるという安易な気持ちでは成功しない」との強い信念で、事業の計画当初から関わってきたということである。

### 【星野和彦】

本年6月、宮津市の有害鳥獣処理施設の問題※に気が付き、様々な角度から考察する一環として本施設を視察した。

本施設は、上述の通り、宮津市と同じバクテリアによる「有害鳥獣処理施設」を使用している。宮津市の施設と異なり優位な点は主に以下の通りである。

- ①動物特有の悪臭を抑える水力脱臭装置の設置。
- ②天井を高くし、ドアが大きく開き、換気扇を複数設置している。
- ③冷凍倉庫はコンテナ1台分が隣接している。
- ④防犯ビデオは部外者の侵入と自身を守るセキュリティ、事故発生時の検証の観点から設置している。
- ⑤鳥獣の亡骸を吊るす電動滑車の設置。

有害鳥獣処理施設の体制に関しては、人件費の高い市職員を起用するより民間活力の導入が効率的だと実感した。

(但し、行政による監視体制は必要)

そして、生きとし生けるもの全ての命の大切さを認識した上で、「山からの頂きもの」を有効に活用する観点に立つことが最も大切なことだと感じた。

### ※宮津市の有害鳥獣処理施設の問題

本施設は昨年9月議会で承認され、本年3月から猟友会の運営で稼働する予定だったが、8月中旬まで市の職員2名が試行錯誤を繰り返して運営中。

その後、漸く猟友会の運営にシフトするとの由。

以上